

『彼女たちの戦争』

2024年07月22日

ロシアのプーチン大統領は、主権を持つウクライナに軍事侵攻し、ロシアの領土にしようとしている。本音は、ウクライナをロシアの言うことを聞く属国にする大ロシア主義の妄想に駆られているのではないか。ウクライナは自国の国民と領土を守ろうと懸命に防衛している。ロシアは自国と、イラン、北朝鮮からのミサイルとドローンで攻撃し、ウクライナは自国と、米国、NATOからの兵器で防戦している。世界からかき集めた爆弾がウクライナの大地に降り注いでいる。それでも、まだ足りないと言う。ウクライナは毎日、死者数を報告している。両軍の兵士の死者数は報告されていないが、おそらく20~30万人が戦死しているのではないか。この戦争によって、兵器産業と武器商人が儲けているだけで、両国は益を得ていない。ウクライナ人は破壊された生活を強いられ、ロシアも世界から見放され、国の力は削がれていくだけである。イスラエルでは、壁を乗り越えてきたハマースのテロによって多くの人々が殺害され、拉致されたと、怒り心頭で10ヶ月に及ぶ、容赦のない攻撃をガザに加えている。パレスチナ人死者数は4万人にもなる。その7割が子ども、女性であると聞く。食べ物、飲み水がなく、兵糧攻め状態で、医療活動もできず、みすみす命を奪われている。まさに、地獄の状態である。若い命が奪われ、どれほど悔しいことか。死者には愛する家族があり、友がいる。彼らの嘆き、悲しみは天地を覆っている。全く非人道的、理不尽な戦争を世界は止められない。分裂と争いを加速し、どの国も軍備拡張に躍起になっている。何とも悔しく、無力感に苛まされる日々である。

作家の小林エリカ氏が、研ぎ澄まされた文章で『彼女たちの戦争 嵐の中のささやきよ!』を上梓している。「はじめに」に「いま、私の生きているこの世界で、戦争がおきている。私はそのことが絶え難く、しかし私はそれを止めるすべを知らず、戦争という巨大なものを前にすると、私という存在は、どこまでも小さく、無力で、何ひとつ変えることなんかできないように思えてしまう」と書き、「けれど、そんな嵐の中で、私は、いま、耳を澄ませたい。かつて生きて、死んだ、彼女たちひとりひとりの、ささやきを、聞きたい」と続けている。そして、28組の女性と女性たちの生き様とささやきと死を報告している。「帯」には「この女（ひと）を見よ!」と書かれている。ヨハネ福音書19章5節に、ピラトが主イエスを「見よ、この人だ（エッケ・ホモ）」と言ったと書かれており、その言葉から引用したのであろう。この女（ひと）とは、砲弾を撃ち合う戦争だけではなく、女性であるがために負わされた苦難に立ち向かう抗いとささやきを遺した女性たちである。それは、科学者、詩人、活動家、スパイ、彫刻家など多様である。「帯」には『歴史』の中で、おおく不当に不遇であった彼女たちの『仕事』がなければ、『いま』はありえなかった。彼女たちの横顔を拾い上げ、未来へとつないでいく、やさしくただけしい闘いの記録」と書かれているように、彼女たちの忍耐と活力には圧倒される。苛烈な闘いの中で命を落としている女性が多く、胸が痛い。ただ一つ「風船爆弾をつくった少女たち」に、ほっとさせられたので、紹介したい。日本が唯一米国本土に攻撃したのは、少女たちの手で作られた風船爆弾であった。直径約10mの巨大な風船に爆弾をぶら下げ、太平洋沿岸から季節風に乗せて米国に飛ばした。その一発がオレゴン州ブライで、6名を殺した。敗戦後51年、風船を作った元少女の5人は、風船がどう使われるのかを知らなかったが、死者が出たことを知り、ブライに行き、謝罪し、犠牲者を悼んだ。ブライの人々は彼女たちを抱擁し、手料理でもてなしてくれたという。過酷な生を生き抜いた彼女たちの闘いは紹介できない。一読をお勧めしたい。そのささやきを聞き入ることが平和につながると信じたいから。